

戦争体験談

横尾 一枝（大正 15 年生まれ）

夫も私もソ連からの引揚者^{ひきあげしや}です。夫は一昨年病で亡くなりました。でも昭和 19 年満州国ソ連国境で参戦し、右腿に砲弾を受け、一夜、戦場の野に置かれ、翌日、野戦病院に保護され終戦を迎え、そのまま捕虜^{ぼりよ}になり労働に酷使^{こくし}され、大豆粉を食べ空腹でふらふら状態だったそうです。毎朝目が覚めると隣の戦友が、向かいの戦友が亡くなっていたそうです。でも夫は 21 才の若さのせいか生き残れたとっておりました。おかげで 24 年の引き上げで舞鶴港^{まいづる}へ帰り、現在になったと老年に入って語ってくれました。秋冬になると傷口^やが病んでおりました。「この位」と他人にいわず我慢しておりました。

私は戦いには行きませんが、当時地図にもものっていない安塚^{からふと}の地から教育の道と樺太^{からふと}という地へ単身^{べんるうしはん}勉勞師範学校へ上がり、教員として行きました。そこで終戦を迎え帰るも出来ず、ソ連兵に機銃掃射^{きじゅうそうしや}され逃げかかれ、命は助かりました。若い女ですので、下宿して宿の人に助けられ、かくまわれ 1 週間は屋根裏にかくまってくださり、その中に僧侶^{そうりよ}、医師、教員と入り口に身分を書いた紙を貼り、三者教養者扱いの政策だったので、その者に手出しせぬよう通達^{つうたつ}が outcome して家の中で自由になりました。

ところが交代して入国してくる兵隊には字も読めないような者もあり、ある日家へ 3 人の兵が入って来て私を連れ出されました。宿の人も近所の人も五連発銃を持ったソ連兵には何も出来ず、泣きながら見送るばかりです。旧学校に私の夫がいて、運を天にまかせ 300 メートル程離れた学校まで生きる気なく歩きました。校長もオロオロするばかり。そこへ偶然^{くうぜん}先輩の先生がいらっしゃり、事情を話し自分の女房^{にようぼう}をこんな目に合わせ、上官に言いつけるとソ連語で上手に喋ってくださり、ソ連兵から放され、一目散^{いちもくさん}に宿へ帰り、命が助かり、上官にこんな事が通じ、それからはロシア、朝鮮、日本と 3 国の学校も始まり交流もでき、一応平常な生活が出来ました。

校長のお力で単身という事から引き上げも第 2 回目に入れて貰い、23 年春に小樽港^{おたる}へ無事帰る事ができ、現在に至っております。

その時の教え子が、9 才、10 才の漢字も読めない状態で分かれて、涙と涙で先に私が帰りました。以来六十年、安否もわからぬその当時の児童も七十才になり、生活に安定性が出てきたのか、新潟だけを頼りに N T T へ問い合わせ、私の現在を何とか尋ねあて、平成 19 年の 5 月に私の元に手紙が届きました。文通の結果、北海道、東京から六人が新潟の某^{ぼう}ホテルで 60 年ぶりの再会。ホテルの玄関でワンワンと抱き合い、まったく忘れていた夫々の名前と姿も浮かび出て、こんな不思議な事が実現しました。